

堂垣内遺跡発掘調査報告

1 9 7 7

広島県教育委員会

ドオガイチ 堂垣内遺跡発掘調査報告

目 次

I はじめに	(1)
II 遺跡の位置と歴史的環境	(2)
III 調査の経過	(7)
調査日誌抄	(9)
IV 遺物の出土状態	(10)
V 出土遺物	(11)
(1) 弥生式土器	(11)
(2) その他の遺物	(14)
VI まとめ	(22)

図版目次

図版1	a 遺跡近景(西より)
	b 同上(東より)
図版2	a 遺物包含層検出状態(西より)
	b 同上(東より)
図版3	a 遺物出土状態(東より)
	b 同上(西より)
図版4	a 遺物出土状態(北西より)
	b 同上
図版5	弥生式土器(1:4)
図版6	弥生式土器(1:4)
図版7	弥生式土器(1:4)
図版8	弥生式土器・粘土塊(1:4)

第1図	堂垣内遺跡と周辺の遺跡(1:50,000)…(3)
第2図	長者原・大元山遺跡出土遺物実測図 (その1)…(4)
第3図	" " (その2)…(4)
第4図	堂垣内遺跡位置図(1:8,000)…(7)
第5図	調査区配置図…(8)
第6図	1T・2T土壙断面図…(10)
第7図	弥生式土器実測図…(16)
第8図	弥生式土器実測図…(17)
第9図	弥生式土器実測図…(18)
第10図	弥生式土器実測図…(19)
第11図	弥生式土器実測図…(20)
第12図	弥生式土器拓影。その他の遺物 実測図…(21)

図表目次

第1表	粘土塊計測表…(15)
-----	-------------

凡 例

- 1 本報告はゴルフ場造成工事にかかる堂垣内遺跡(尾道市西藤町)の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は尾道ゴルフ観光株式会社から委託を受けて広島県教育委員会がおこなった。
- 3 本書の執筆は加藤光臣・是光吉基が行い、金井亀喜が編集した。
- 4 出土遺物の整理には調査員があたり、図面の製図は向田裕始・加藤光臣が行った。なお、出土遺物の写真は中田昭が撮影した。
- 5 第1図に使用した図は、建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭52、中復、第50号

I はじめに

昭和49年4月15日、尾道ゴルフ観光株式会社から県教育委員会あてに尾道市木ノ庄町木梨、木梨山方、原田町梶山田、西藤町の山林約110haにわたってゴルフ場造成の計画をもっているが、当該地に埋蔵文化財が存在しているか否かの問合せがあった。

昭和42年、文化財保護委員会刊の『全国遺跡地図、広島県』によればこの時点では遺跡は確認されていなかったが、さらに詳細な分布調査を実施すれば確認される可能性が強いため昭和49年4月22日から同月26日にかけて当該地内の分布調査を行なった。

その結果、当該地及びその周辺地域において8遺跡の存在が明らかになった。このうち宗北古墳、清宗3号古墳、山方遺跡がゴルフ場造成予定地内に存在しており、このことを尾道ゴルフ観光株式会社に回答するとともに、遺跡の保存を同社に要望した。そして協議をすめた結果、当該地に含まれる遺跡を保存することで了解を得ることができた。

その後、同社はゴルフ場造成のため、工事用道路の新設や既設道路の拡幅工事を実施していたが、昭和50年4月8日、西藤町堂塙内の工事現場から土器が出土したことが同社から尾道市教育委員会社会教育課吉原係長あてに連絡され、さらに同係長から県教育委員会にその報告があった。そこで同年4月11日、文化財保護室は松村昌彦指導主事を現地に派遣し、同社と協議を行った結果、土器出土場所の道路拡幅工事は取りやめることとし、出土土地は崖面になっているため崩壊の可能性があり、盛土をして保存することとし、現状で保存する方向で検討するように依頼した。しかしながら、その後ゴルフコースなどの関係から現状保存することが困難であり、また、出土地点の崩壊が顕著な状態を呈してきたためやむを得ず発掘調査を実施することに踏切った。

発掘調査は51年4月21日から5月8日までの12日間にわたり次のメンバーで実施した。

是光吉基 広島県教育委員会事務局管理部文化課指導主事

山 県 元 ケ

加 藤 光 順 ケ

三 好 晴 弘 ケ

なお、調査にあたっては尾道ゴルフ観光株式会社、尾道市教育委員会、地元の方々の御協力を得、また長者原、大元山遺跡出土遺物の資料作成にあたっては、尾道市教育委員会、尾道郷土美術資料館から多大なる協力を得た。

ここに記して謝意を表したい。

II 遺跡の位置と歴史的環境

堂塙内遺跡は尾道市西藤町堂塙内 572 番地に所在する。

この地域は瀬戸内海から深く湾入した松永湾に注ぎ込む藤井川の約 5 km 上流の山間地帯であり、北側には標高200 m 級の急峻な山が連なり、南は尾道港のすぐ背後にまで続く標高100~160 m の比較的緩やかな丘陵地帯が広がりをみせる。藤井川はこのような山間の谷間をほぼ東西方向に開拓し、また、河川流域の所々に狭い沖積平地が形成され、現水田面はこのような低平地を中心として開拓谷の奥深く、かなりの高所にまで認められる。

遺跡はこの木梨山方の山腹尾根上に位置しており、標高約200 m を測る。藤井川に面した南側は急峻な尾根が延びるが、北側は比較的緩やかな緩斜面となっており、水田・畑地の広がりが認められ、北東側では藤井川同様松永湾に流入する本郷川の上流域に接している。また遺跡の立地する丘陵上からは、南側に松永湾、尾道水道を眺望することができる。

この松永湾を中心とする地域には縄文時代の遺跡がかなり集中的に存在しているが、近時、埋め立てや造成事業などによって遺跡は消滅、破壊に瀕しており、旧状を止めるものは極めて少ない。

高須町の松永湾頭には県史跡に指定されている大田貝塚とこれに接して妙見山遺跡が存在する。大田貝塚は1925年の発見以来5次にわたる調査が行なわれ、^① 総計66体ともいわれる人骨を出土しており、古くより大田貝塚人として学会に報告されている。また1964年度の広島県教育委員会による調査では、人骨やサスカイト製石器、スクレーパーなどとともに多數の土器が出土し、^② 縄文時代前期前半から中期全般を主体とし、海進海退現象の影響を受けつつも後期・晚期にまで継続する広範な遺跡であることが確認され、後期に到って大田貝塚と妙見山の二遺跡に分化したものと考えられている。^③

なお松永湾の東岸には縄文早期～晚期の遺物を出土する福山市馬取貝塚をはじめ下迫・市場など中期・後期の貝塚が比較的近接して存在している。これらは松永湾という比較的狭く緩やかな海域を共有するという同様な立地条件のもとに存在し、しかもかなり長期に亘る貝塚の形成状態は互いに密接な関係にあることを想定させ、当時の集団関係を探る上で貴重な資料を提供するものといえる。

弥生時代の遺跡は、沿岸部、山間部ともその存在が認められるが、詳細な分布調査が行われていないこともあって、その様相はあまり明らかにされていない。

現段階では、前期の遺跡は確認されていないが、松永湾に至る藤井川・本郷川の下流域小冲積地で将来発見される可能性は高いものと考えられる。中期になると、高須町で波状文・斜格子目文などの櫛目文を有し、中期中葉の時期と考えられる巻形土器の出土が伝えられる。また時期は不明であるが浦崎町塚尻長者ヶ原で須恵器、土師器などとともに弥生土器・石斧・劔轆車などの出土が伝えられ、同町新田比横山ではサスカイト製石盾丁1、石鏡15枚、同町上組山端では石斧が單独出土しているなど、島嶼部でも遺跡の存在が認められ、少なくとも弥生中期には沿岸部の小河川流域の小冲積地を単位に農耕集落を形成する小集団が現れていたことが窺え、次第に島嶼・山間部への開発が進められていったものと考えられる。^④

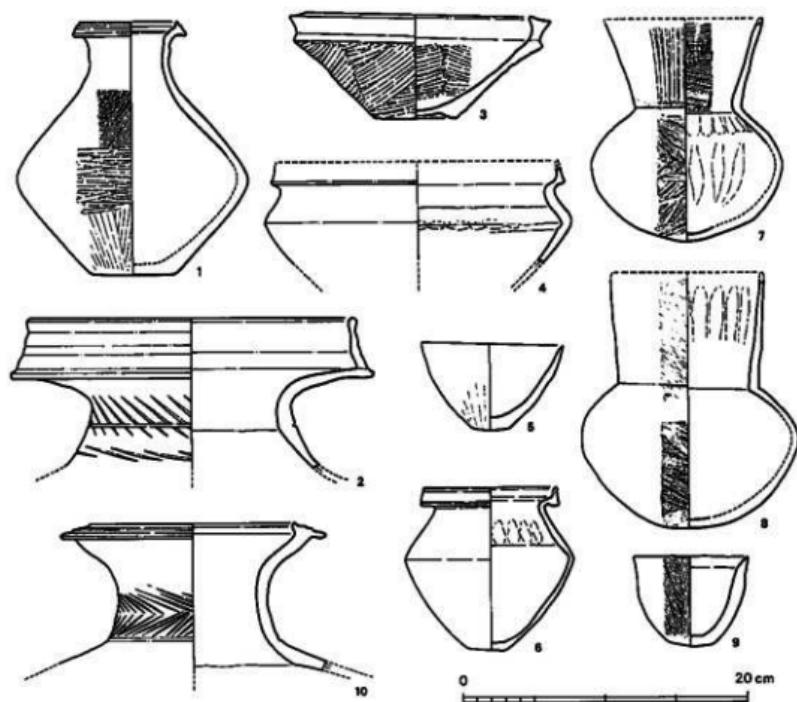
後期になると沿岸部では高須町に大元山遺跡が現われ、山間部では、本郷川上流域の原田町に長



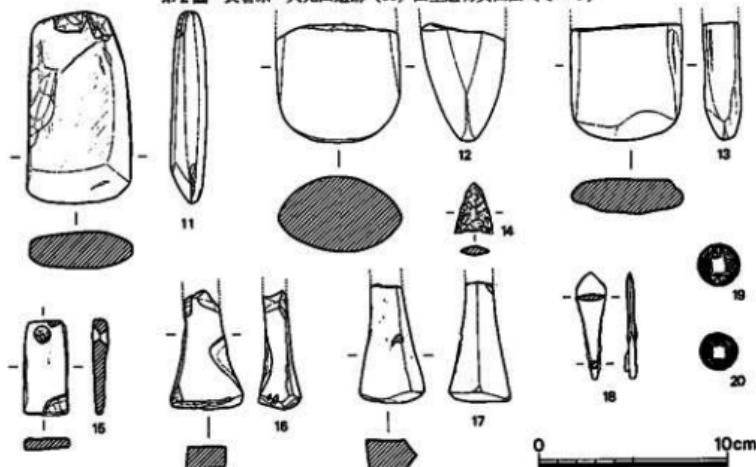
第1圖 進跡分布図

(1 : 50,000)

1. 常陸内西道跡
2. 常陸内西道跡
3. 天神山古墳
4. 龍尾山城
5. 安藤古墳
6. 摩胸寺跡
7. 矢原山遺跡
8. 名荷山薙跡
9. 平原塚塚・雄塚
10. 長者原道跡
11. 大上山塚跡
12. 久都原古墳群
13. 中野大塚古墳群
14. 字土塚
15. 薔子追古墳群
16. 大寺古墳
17. 球井古墳
18. 丹田山古墳
19. 下組古墳群
20. 茅原古墳
21. 広坂古墳群
22. 大田貝塚
23. 黒崎山古墳
24. 大元山古墳
25. 平山古墳
26. 玉比壳塚
27. 吴松古墳群
28. 馬場向古墳群
29. 高岩古墳群
30. 戸田古墳群
31. 岩端古墳
32. 向山古墳
33. 長被古墳
34. 矢捨古墳群
35. 松本古墳
36. 大平古墳
37. 若宮塚跡
38. 大泊塚跡
39. 白土塚跡群
40. 荒神山塚跡
41. 池ノ内古墳
42. 紗見山遺跡



第2図 長者原・大元山遺跡(10)出土遺物実測図(その1)



第3図 長者原出土遺物実測図(その2)

^⑤者原遺跡、摩訶衍寺遺跡、藤井川上流域では、堂垣内遺跡及び、堂垣内西遺跡が認められる。長者原遺跡は河川との比高約30mの丘陵上に位置し、古式土師器や鐵鐵、磁石とともに櫛目文を有す中期土器片や後期土器、打製石器、磨製太形蛤刃石斧、不定形刃器などの他開元通宝、乾隆通宝など各種の遺物が出土しており（第2・3図）、遺物も広範囲に散布することより、弥生時代～中世に至る複合遺跡と考えられる。また長者原遺跡の西側にそびえる標高382mの摩訶衍山に存在し、県重要文化財十一面觀音立像を所蔵する摩訶衍寺付近に赤生土器片を出土する摩訶衍寺遺跡がある。

なお、堂垣内遺跡は摩訶衍山との間になだらかな緩斜面状をなす谷一つをへだてて対峙する標高200mの山稜に連なる尾根上に位置しており、摩訶衍寺遺跡と類似する位置環境にあるといえる。

以上のように山間地域の遺跡のあり方には河川流域の沖積平地に近い低丘上に立地するものと河川からかけ離れた山間高所に位置する遺跡の二者が認められ、山間地域の小集団のあり方とその生産基盤を考える上で興味ある様相を呈している。^⑥

なお、狹鉢銅鉢1と網形銅鉢2を伴出した久山田町大峰山遺跡とは比較的近距離にあるといえ、青銅器を軸とする共同体祭祀を通じて、地域集団の共同体的結合が進行していたことも想定される。

古墳時代になるとかなり広範囲に多くの遺跡が認められるようになる。古墳の分布状況をみると、松永湾岸を中心として海浜に近い独立丘陵などの比較的低平地に近い場所に立地するものと、河川流域あるいは河口近くに形成された沖積地を見下ろす丘陵上に占地するものなどがあり、更にこれらは単独で存在するものと散基が群集して存在するものとに分けられるようである。

まず前半期の古墳としては松永湾岸に、尾道市高須町黒崎山古墳、大元山古墳、西藤町玉比売塚古墳、福山市神村町松本古墳が現われる。

^⑦黒崎山古墳は松永湾頭に近い独立丘陵上に位置する全長約70mの前方後円墳であるが、1964年尾道市教育委員会による調査後土取り工事により全壊したのである。竪穴式石室を内部主体とし、刀子、円筒埴輪などが出土している他、調査前に墳頂部で朱詰めの臺と鐵刀が出土したと伝えられている。

^⑧大元山古墳は黒崎山古墳の約300m西側の独立丘陵上に位置するが、未調査のまま削平され全壊したものである。内部構造等詳細については不明であるが、全長50m前後の前方後円墳であったものと想定されており、鐵刀、鐵鐵や円筒埴輪、形象埴輪片などが表採されている。玉比売塚は藤井川河口の沖積地を見下ろす丘陵上に立地する円墳であり、竪穴式石室より銀齒文鏡1、丁字頭を含む勾玉2・管玉7が出土しており、比較的古式な様相を呈している。松本古墳は本郷川河口に近い低平地に存在し、茶臼山とも呼ばれている古墳であり、一辺約32mの二段築成の方形墳と称されてきたが、近年ではその墳形について疑問視されてきている。未調査であるため詳細は不明であるが、葺石が確認されており、墳丘より須恵器、土師器片の他円筒埴輪や水鳥形などの形象埴輪片が表採されている。また盗掘を受けた際竪穴式石室が確認され、鐵劍が出土している。以上は、松本古墳玉比売塚を除きいずれも前方後円墳で比較的大きな墳丘を有し、内部構造が竪穴式石室で、墳丘には円筒や形象埴輪などを囲繞させるなどの共通的特徴をもち、古式の様相を呈すことより、5世紀～6世紀前半代にかけて築成された可能性が強いものと考えられる。これら大形古墳の突発的出現の様

相は、瀬戸内海交通の要衝という地理的環境とも無関係なものではないものと思われる、周辺遺跡の分析と同時に畿内政権との関係も重要視する必要があるものと考えられる。なお、箱式石棺を内部構造とするものに高須町平山・觀音山・阿草嶺山・太田諱訪山・池ノ浦古墳他、藤井川上流の木梨で刀子を出土した天神山古墳などの存在が知られるが、伴出遺物がほとんどなく時期決定の要素に欠けるが、横穴式石室導入以前のものである可能性が強い。

横穴式石室を内部構造とする後半期の古墳は、かなり広範囲に認められてくる。特に本郷川の西側と藤井川河口の冲積地の背後に位置する丘陵上に多くが群在し、前半期古墳と同様の傾向を示している。また島嶼部や山間部の河川流域に沿って開拓された谷間に見下ろす丘陵上にもその分布が認められ、単独的存在のものと數基が群集するあり方をみせるものがある。

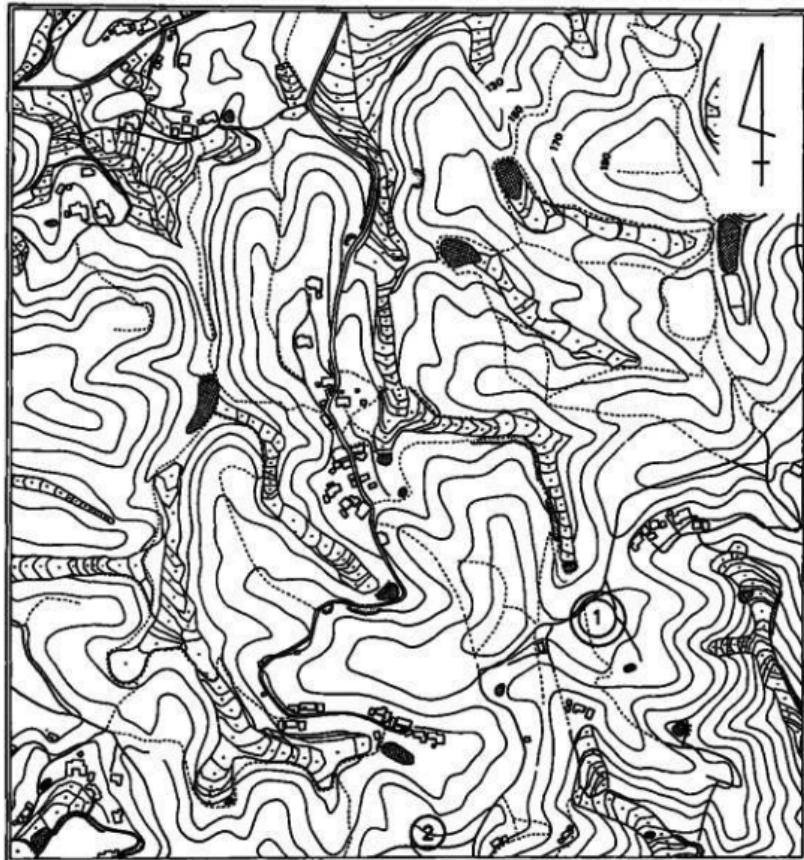
松永湾沿岸部では、福山市今津町馬場向古墳群（5基）・長松古墳群（4基）・高岩古墳群（3基）・戸田古墳群（3基）・向山古墳・長波古墳などが近接して存在し、西側松永湾頭では、土玉や玉類を出土した尾道市山波町池ノ内古墳、製塙土器を伴出した広塙古墳群（2基）などが散在している。多くは全長5~6m、幅2m前後の小規模な横穴式石室であり、盜掘破壊されているものが多い。この内長波古墳は、両袖式の玄室であり、長さ約4mと短いが、壁面は小口横で、天井部に近くなるほど石室幅をせばめドーム形を呈す。その古式な構造の特徴より横穴式石室導入初期のものとも想定され興味深い。小河川流域及び山間部に位置する古墳としては須恵器とともに銅鏡を出土したと伝えられる吉和町天神山古墳の他、栗原町下組古墳群（2基）、栗原古墳、藤井川流域では猪子追古墳群（2基）、大寺古墳、池田山古墳、柳井古墳、本郷川流域では中野大塚古墳群（2基）、宇土古墳、馬具・鉄刀・ノミ・勾玉などを出土した久都原古墳群（2基）などがある。一方島嶼部にも浦崎町戸崎古墳群、塙尻古墳、青木古墳などが現われてくる。

- 注① 清野謙次「備後國沼隈郡高須村太田竹の鼻貝塚」民族第2卷第2号 1927 や島田貞彦「備後國沼隈郡高須村太田貝塚について」歴史と地理第26卷第4号 1930などをはじめ古くより数多くの文献がある。
② 潮見浩・川越哲志・河瀬正利「広島県尾道市大田貝塚発掘調査報告」広島県文化財調査報告第9集 1971
③ 松崎寿和・潮見浩・木下忠・藤田等・本村豪章「松永市馬取遺跡調査報告」広島県文化財調査報告第4集 1963
④ 村上正名「備後柳津村馬取下追賀貝塚調査報告」1939
⑤ 村上正名「福山市史」上巻 1963に図面が載せられている。また、桑原隆博氏の御教示により最近高須町で中期撫貝土器片が発見されていることが判明した。
⑥ 注②と同じ。
⑦ 遺物は尾道市郷土美術資料館に収蔵されている。壺・甕・鉢・高杯などの器種があり、壺・鉢には壹塙内出土例と同形態のものも見出される。
⑧ 吉野益見「備後原田村弥生土器及窯の遺跡」考古学雑誌第26卷第10号 1936 吉野益見「原田村史」1936
⑨ 注⑧と同じ。
⑩ 木下忠「尾道市大峰山出土銅鋒銅劍について」広島考古研究第2号 1960
⑪ 未報告であるが、注②の文献に若干触れられている。
⑫ 以前は全長190mの前方後円墳とも称せられたが、最近では前方部の先に存在する小丘を含んだ誤認と考えられている。
⑬ 村上正名「福山市史」上巻 1963
⑭ 注②と同じ。
⑮ 1973年度尾道市教育委員会調査未報告
⑯ 向田裕始氏の御教示による。
⑰ 1974年度尾道市教育委員会調査未報告
⑱ 注⑮と同じ。
⑲ 出土遺物は尾道市郷土美術資料館に収蔵されている。

Ⅲ 調査の経過

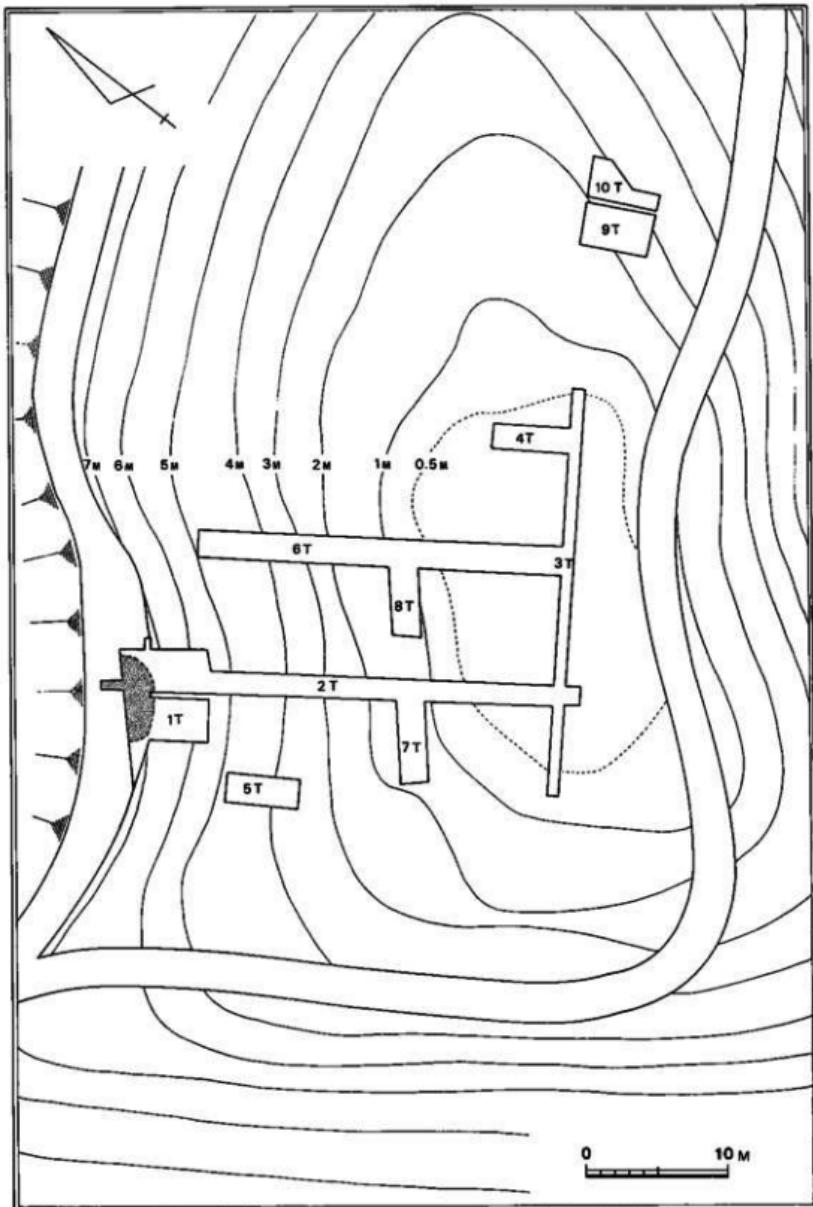
遺跡は水田が入り込む細い谷間の奥端の丘陵斜面であり、水田面との比高差は約20mである。丘陵上には平坦面が存在するが、畑地として利用されていたらしく耕作による搅乱によって地山が露出している部分も認められた。

この丘陵上より7m下の北側斜面に工事用取付道路がつくられ、その掘削崖面に土器片が露出していた。包含層の存在する部分は若干薄入した地形を示し浅い谷状を呈していることが知られたので、丘陵上あるいは斜面に住居跡が存在する可能性を想定して、まず丘陵の長軸に対して直交もしくは平行する調査区1T～8Tを設定した。その結果1T(3×6m)・2T(1.5×33m)で土器破片の遺物出土状態が明らかにされたのと3T(0.5×29m)東端で土器破片が出土した以外他の調



第4図 畠塙内遺跡位置図(1:8,000)

1. 掘削内遺跡 2. 畠塙内西遺跡



第5図 調査区配置図（アミ目は土器満り）

査区では遺構・遺物は全く検出されなかった。特に斜面から丘陵上まで通して設定した 2T の上方斜面や 6T (2 × 27m) では地形に沿った自然堆積の状態を示すにすぎず、土層に変化は認められなかった。また丘陵上では 3T で土器片が出土したことより遺構が存在した可能性は強いが、3T, 4T (2 × 5m) とも 5~10cm で地山に達し、何ら落込みらしいものも検出されなかった。周辺は地山がかなり露出しており、後世の耕作による著るしい擾乱を受けているものと考えられた。

なお調査中、南東側斜面の工事用取付道路面で土器片を表探したため、4T から約 13m 東の緩斜面に 9T (3 × 5m) · 10T を設定した。その結果、表土層より弥生式土器片、土師質土器片が出土し、表土下約 60cm の地山直上で、炭化材とともに、焼土面を検出し何らかの遺構が存在することを確認したが、調査期間の都合で一組埋め戻し遺構検出は別途調査に期すこととした。なお調査期間中、本遺跡の南西約 800m の尾根上で弥生式土器片が散在する地点を発見し、堂塙内西遺跡と命名した。

調査日誌

4月21日(水)小雨

尾道ゴルフ観光株式会社・尾道市教育委員会関係者と調査の方法などについて協議した後、現場へ器材を運搬する。立木の伐採を行い、道路崖面に露呈する遺物包含層の状態を観察する。

4月22日(木)曇り後晴れ

立木伐採後、谷底地形をなす狭い凹部に遺物包含層がレンズ状に堆積することを確認し、遺跡の近景及び、道路崖面の遺物包含層露呈状態の写真撮影を行う。1T · 2T を設定する。

4月23日(金)曇り後雨

包含層断面の滑掃と併行して 1T · 2T の掘り下げを開始したが、途中雨天となったため作業を中止する。

4月24日(土)晴れ

遺物包含層の東西方向断面図を作成し写真撮影を行う。また縮尺 1 : 200 で地形測量を行う。

4月26日(月)晴れ

1T · 2T の調査を行う。遺物包含層は斜面に沿った堆積状態を示し、遺構と考えられるような落込みは全く認められない。

なお、包含層より土器片とともに鉄器片 1 が出土したが、腐蝕著しく取り上げの際破損してしまった。

4月27日(火)晴れ

1T · 2T の遺物出土状態を明らかにする。その結果包含層は東西約 5m の幅で認められるが、丘陵斜面の上方には広がらず谷状の凹地に集中し、地形の傾斜に沿って下方へ落込むような状態を呈することが判明した。

丘陵斜面に 5T · 7T を設定し、調査を行うが、遺構遺物は全く検出されず。

4月28日(水)晴れ

2T を丘陵上に延長し、更に 3T を設定した。丘陵上は畠の耕作によってかなり擾乱されており、地山が露出している部分も認められ、遺構の残存する可能性は少いものと考えられる。1T · 2T の遺物出土状態の写真撮影を行い、遺物を取り上げる。

4月29日(木)雨

雨天のため作業を中止し、遺物整理を行う。

4月30日(金)曇り時々小雨

2T の遺物包含層の南北方向堆積状態観察のため道路下に幅 50cm の小トレンチを試設し掘り下げる。その結果、道路下に包含層が存在し、更に斜面下方に延びることを確認する。

2T · 3T の断面図を作成する。6T · 8T を設定し調査を行うが遺構・遺物は全く検出されず。

5月1日(土)晴れ

3T の東で土器片 1 が出土したので 4T を設定し調査を行うが土層に変化は認められない。

5月6日(木)晴れ

4T · 6T · 8T の精査を行うが、結局遺構は全く検出されなかった。なお、丘陵南側斜面の工事用取付道路面で土器片を表探したので、丘陵頂部より東寄りの緩斜面に 9T を設定し掘り下げる。表土層より弥生式土器片、土師質土器片、木炭片が出土する。

5月7日(金)晴れ

10T を設定し 9T とともに調査を行う。地山直上で焼土面と炭化材を検出し、何らかの遺構が存在する可能性が強いものと考えられた。

5月8日(土)晴れ後曇り一時雨

9T · 10T の調査の結果、焼土面の広がりはかなり広く東側斜面に遺構が存在することは確実と考えられたので、他日あらためて調査を行うこととし埋め戻す。器材をまとめ調査を終了した。

IV 遺物の出土状態

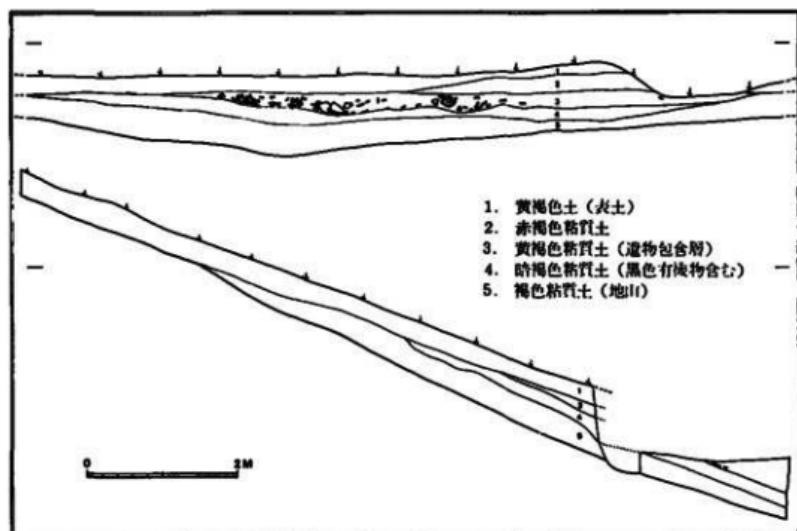
1T・2T調査区域内で遺物包含層が検出された。

地山面は約25度の傾斜角度を有し、土層も地形の傾斜に沿った堆積状況を示す。

遺物は表土下約25cmの黄褐色粘質土中に包含されており、土層中には黒色微粒子の有機物を若干含む。また包含層と地山面との間には暗褐色粘質土・褐色粘質土の堆積層が認められ、暗褐色粘質土中には包含層と同様黒色微粒子有機物を含むが遺物は全く包含しない。(第5図)これらの土層は凹状部で等高線に沿ってレンズ状に堆積するものであり、他の傾斜面とは堆積状態を異にする。遺物はこの凹状部で東西に約5mの広がりをみせるが、包含層の主要部を工事用取付道路によって切断されており、道路崖面より上方では包含層の上端部を若干残しているに過ぎず、遺物の残存状態は良好とはいえないかった。しかし道路を掘り下げたところ、道路下にも包含層が続いていることが判明し、小トレンチによって南北方向に約3m、レベル差にして約1m下まで遺物包含層の確認を行ったが、断面の観察によると更に斜面下方にまで広がる状況を呈していた。

遺物は土器が主体であるが、出土状態に規則性は認められず、壺・甕・鉢・高杯・器合など様々な器種が混合し重なり合っており、土器混状の出土状況を呈すといえる。またこれら土器混りに混入して鉄器片・粘土塊が出土した。

なお、これらの遺物は、堆積土層の傾斜に沿って斜面下方に流れ込むような出土状態を示し、土器も破片となっているものが多く、わずかに小形の高杯一点がほぼ完形に近い状態で残存していたといえるにすぎない。



第6図 1T・2T土層断面図

V 出 土 遺 物

(1) 弥生式土器

堂塙内遺跡出土の土器は、壺・甕・鉢・高杯・器合の5器種に大別されるが、これらは各々形態・成形手法などの特徴によって数種に分類できる。

なおこれらは黄褐色～赤褐色の色調を呈するものが多く、器種によって多少の差は認められるが、胎土中に径1～3mm程度の石英・長石小粒子を含んでおり、焼成状態も大同小異といえる。それ故特に注意されるもの以外は、色調・胎土・焼成等についての説明は省く。

壺形A（6）一直立したやや長頸気味の頸部に内傾度の強い口縁部を有するものであり、口縁部を鉢形状に著しく拡張させている。

口縁部及び頸部は内外面共横ナデ調整であり、頸部には横ナデの影響による彫みを生じている。

甕形B（7）一頸部は短く強く外反させ口縁端部を肥厚させる。口縁部外面は壺Aと同様著るしく内傾している。なお口唇部を若干内側に折り返し、内面に小さな立ち上がりをつくっている。口縁部外面に退化凹線を廻らし頸部まで内外面共横ナデ調整である。

壺形C（1～4）一頸部を強く外反させ、口縁部は内傾気味に上方へ拡張させているものであるが、これらは成形手法の差違により更に二種に細分される。

C₁（1, 2, 4）一口縁部に横ナデ手法によると考えられる退化凹線が認められ、口縁下端部を若干外方に突出させている。また横ナデの影響により、外反した頸部上方の内外面は器壁に凹凸を生じさせている。

C₂（3）一凹線は認められず横ナデ調整のみによるもので、口縁下端部も突出しない。

また口縁内面の立上り部にはヘラ状工具によって凹線状の沈線が一本廻らされている。

なお壺C類は長頸壺の形態（3～5）を呈すものと考えられる。これらは頸部外面にナデあるいは縱方向のハケ調整を施した後、ヘラ状工具による凹線（77）を數条廻らす。頸部は比較的張りが強くなく、最大径も器高の2分の1前後の位置にあるものと考えられるものであり、胴部上半外面は斜方向あるいは横方向のヘラ磨き調整が施されており、光沢を生じているものもある。下胴は縱方向のヘラ磨き調整と考えられる。ただ3はやや不明瞭であるが外面の調整痕が平行条線状を呈していることから、ハケ状工具の一種である板の小口部分によるナデつけにより、ヘラ磨き調整と同様の効果を生じさせているものかもしれない。内面は最大径部よりやや上方以下を横方向にヘラ削りを施し、胴上半から頸部はナデ調整しており、成形時の紋目や指頭圧痕の残存する部分もある。

この他、壺頸部にヘラ状工具の押捺によって綾杉文・斜線文を施すもの（78～80）も破片に見い出されるが、これらは壺AあるいはC類の口縁形態のものに属するものと考えられる。

壺形A（8～25）一壺に比べて口縁部の上方への拡張の著しいものである。壺同様手法の差により二種に細分される。

A₁（9～14・19・20）一頸部を「く」字状に外反させ、口縁部は直立気味に上方へ著しく拡張させ複合化している。口縁端部は丸くおさめ、外面には不明瞭な退化凹線を廻らせており、内外面共頸部まで横ナデ調整である。

なお口縁内面にヘラ状工具によると考えられる沈線が残る例(10)もある。

A₁ (8・15・21~25) 一口縁部の形態はA₁とほぼ同様上方へ直立気味に拡張させているが、凹線は認められず横ナデ調整のみのものである。8は口縁外面上方にヘラ状工具による沈線一本が残る。

なお菱形A類は胴の扱りが弱いもの(10・16・20・24)とやや胴扱りが強く最大径が胴部上位の高い位置にあると考えられるもの(17)がある。またこれらは上胴部外面ナデ調整のもの(17)と、縱あるいは斜方にハケ調整しているもの(10・13・16・19・21・24)とがあり、下胴部は縱方向のヘラ磨き調整である。内面は胴上半をナデ調整し、最大径部よりやや上方以下を横方向にヘラ削りを施すもの(10・16・17・20・21)とヘラ削りが頭部近くにまで及ぶもの(8・11・24)とが認められる。また胴扱りが強く最大径部が「く」字状に屈曲気味のもの(18・19)があるが、この種のものは内面屈曲部に成形時の指頭による押捺痕を残し、後述する鉢形B類の成形手法と類似する特徴をもつといえ、あるいはA類とは区別すべきものかもしれない。なお19は頭部に焼成前に穿孔した円孔が認められるが紐孔であろうか。

菱形B(26) 一口縁部を「く」字状に外反させ、口縁端を肥厚させているのみで上方に拡張させないが、口唇部は鋭角的なものと考えられる。口縁外面は頭部まで横ナデ調整し、内面は頭部以下にヘラ削りを施す。胴の扱りはほとんどなく小形の型になるものと考えられるが、B類はわずかこ的一点のみである。

鉢形A(27~34) 一胴上部を一組屈曲させ、明瞭な段をつくり更に直立気味に立ち上がらせており、口縁部はやや内傾して横方向に拡張したものであり、拡張面に2~4条の退化凹線を残すA₁と四線を施さないA₂に分けられるが、形態、その他の手法は全く同一である。

口縁下外面は内湾する曲線を描き、上胴部に明瞭な段をつくる特徴的な形態を呈す。口縁部拡張面は一坦外反させた口縁端部を内側に折り返してつくったものであり、折り返し部内面にシワ状の接合面を残すもの(28・29・31・32)が認められ、菱形B類の手法に通ずる特徴をもつ。なおこれらは調整痕の残存するものの観察によって、口縁部から屈曲部まで内外面とも横ナデ、屈曲部以下胴部はヘラ磨き調整を施していることが看取され、内面は横方向(28・33)・外面は横方向もの(31・32)と斜方向で「ハ」字状の磨き方を呈するもの(29)などが認められる。

鉢形B(35~53) 一口縁部の上方への拡張が著しく、菱形A類と同様の口縁形態を呈し、胴部は鋭角的な曲屈部を有し、鉢A類に若干類似した特徴をもつものである。なお口縁部に数条の退化凹線を施すB₁(35~41)と四線の認められないB₂(41~50)があるが、B₁・B₂とも形態的特徴は全く同一といえる。

「く」字状に強く外反された頭部に、上方に直立気味に拡張させ複合化した口縁部を付し、口縁端部は丸くおさめている。胴部は上方を「く」字状に鋭角的に屈曲させ、明瞭な段をつくっている。この屈曲部にはヘラ状工具によって一条の凹線あるいは段状部を残らすものが多いが、2~3条の凹線を施すもの(36・37)と全く凹線を施さないもの(47~49)とがある。また凹線上に更にヘラ状工具押捺による刺突文を付すもの(35)も認められる。

口縁部から頭部にかけては内外面共横ナデ調整しているが、B₂類には、口縁上方にのみ偏してヘ

ラ状工具による浅い凹線状の沈線を1~2条残すもの(41・43~46)がある。

脚部以下胴下半は横方向・縦方向・斜方向などのヘラ磨き調整を施す。また頭部にヘラ状工具をナデつけた痕跡の認められる例(35・49)もある。

周曲部内面は、粘土接合面強化のために指あるいは棒状工具で押されたものと考えられ、押捺痕が顯著に残存する。これはB類の全てに認められ、内面成形手法の特徴といえる。

胴下半は使用による摩滅が著しく、調整痕がやや不明瞭であるが、ヘラ削り痕と考えられる砂粒の動きが看取されるもの(41・43・46)の他、ヘラ状工具を横方向にナデつけたと考えられる痕跡を残すもの(37・39・48)、ハケ目状の条線が認められるもの(38・42・46)などがあることより、基本的には、ヘラ削り後、ヘラ状工具あるいはハケ工具の一類である板の小口部によるナデつけ調整によって滑らかに仕上げたものと考えられる。

なおB類には大形の鉢があり浅鉢(52)と深鉢(51・53)の形態が認められるが成形手法は小形のものとはほぼ同一である。51の頭部外面にはヘラナデつけ痕が看取され、53は頭部外面に下から上方への顯著なヘラ磨き調整を施す。また内面はヘラ削り後板の小口部分によるナデつけ考えられ、横方向の砂粒の動きが若干看取されるとともに、ヘラ磨き痕とも識別しにくいような浅く幅広い条線が斜方向及び横方向に走るのが認められ、若干光沢を有しヘラ磨き調整と同様の仕上げ効果を生じている。

鉢形C(54)一口縁部の拡張は認められず、斜上方に伸びる脚部から単に口縁部のみ直立気味に立ち上がらせたもので外面は外湾気味の緩やかな曲線状を呈し、口縁端部は丸くおさめる。外面は横ナデ調整し、内面は口唇部より1.5cm以下に横方向のヘラ削りを施している。

鉢形D(55)一器形は鉢Cに類似しているが、やや内傾気味に立ち上がらせた口縁部外面に幅広く浅い退化凹線を3条残らし、鉢Cに比して口縁部と脚部の区別を明瞭にしている。内外面共横ナデ調整である。なおC・D類ともわずか一点づつ出土しているにすぎなく、やや特異な例である。

高杯A(56)一器高10.8cmの小形の高杯で口縁部は直立気味に立ち上がっており、口縁端部は平坦状をなす。脚部は短く、ほぼ直立した脚柱部から強く斜外方に広がり、脚端部は肥厚され外面が斜上方に外傾している。口縁部は内外面共横ナデ調整、杯底部は外面が斜横方向に、内面は中心部を方形状に取囲むように目の細いヘラ磨き調整を施す。なお外面杯部と脚部の境界には成形時の指頭圧痕が淡く残存する。脚柱部から脚台部にかけてはタテ方向のヘラ磨き、脚端部は横ナデ調整している。内面は脚柱部に紋目を残し、脚台部は脚端まで横方向にヘラ削りを施す。脚台部には2孔一对の小円孔が穿孔されており、3ヶ所に配されたものと考えられる。なお脚部と杯部は連続成形であり、最終成形段階で粘土円板を貼付けている。

高杯B(57~59)一杯部は口縁部が強く外反し、ラッパ状に開くもので、口縁部と杯底部の境界が短く直立し明瞭な段を有する。摩滅のため調整痕は不明瞭であるが、58は杯内底面に放射状のヘラ磨きを施し、段状部に口縁部との接合を強化するためか、ハケ状工具をナデつけた痕跡が看取される。また脚部と杯部は、A類と同様連続成形と考えられるが、58の場合粘土円板貼付手法と若干異り、粘土塊を充填して塞いでいる。この粘土塊の下部は若干いびつに凹んでおり、あるいは脚部内面をヘラ削りする際、工具の先端が当たって生じた痕跡であろうか。

脚部は59の形態のものと考えられる。脚柱部が細くすぼまり、脚端部は下方に拡張され立ち上がりをもつ。また脚台と脚端の境は鉤状に突出しており、脚端から脚台部下方にかけては外面に浅い退化凹線を数条廻らす。内面はA類同様脚柱部に該目を残し脚台部以下に横方向のヘラ削りを施す。坏部と脚部は連続成形であり粘土円板貼付手法を示す。

なお57・58の坏部に59の形態の脚部を伴うものと考え一応B類に一括したが、57・59は赤褐色の同質の胎土であるのに対し58は黄褐色で胎土もやや精良され、手法も粘土塊充填法を示し若干異なる特徴を有すことより、あるいは異なる形態の脚部を有するものかもしれない。今後の検討を必要とする。

脚台（60、61）一口縁部と脚台部が各々一点づつ出土している。60は小形の器台と考えられるが口縁部のみである。而しC類とはほぼ同形態を呈し、強く外反した口縁部を上方に拡張し、外面に退化凹線を廻らすが、内面及び頸部外面は斜横方向のこまかいヘラ磨きを施しており、而しC類とは調整手法を異にする。

61は大形器台で脚台部のみである。脚台は緩やかに斜上方にのび、脚端部は上下に肥厚させ上端を斜上方に突出させている。脚端部外面は横ナデ調整し、退化凹線を残す。脚台部には2孔一対の円孔を3~4ヶ所に配し、円孔下にはヘラ状工具で細い沈線を6条廻らしている。円孔上はタテ方向のヘラ磨きを施し、内面は脚端まで横方向の頗著なヘラ削りである。

以上の土器の他、壺・甕・鉢と考えられる底部（62~76）が出土している。

これらは絶体的に底部の厚みは薄く、ほとんどが外面にタテ方向のヘラ磨き調整を施し、外底面にも68のように一方向のヘラ磨きを施すという特徴を有す。内面は使用による摩滅のため成形痕がやや不明瞭であるが、形態・成形手法の特徴により大きく4分類される。

A（62~69）は底径が比較的小さく、胴部への立ち上がりが急な形態を呈しており、内面にヘラ状工具痕の認められるもの（64・66）・指で押えた痕跡を残すもの（67・69）が認められる他、平底の外底面が若干膨む形態を呈すもの（62~64・68）もある。これらは甕と考えられるが、鉢A・B類の底部が混入している可能性もある。B（70・71・74）は内面に砂粒の動きが看取され、ヘラ削りが施されていると考えられるものである。下胴部の立ち上がりはAに比べて緩やかであり而しの底部と考えられる。C（72・73・75）はB同様の形態を呈すが、外面に「ハ」字状のヘラ磨き調整の認められるもの（72）や、内面にヘラ磨き状の巾広く浅いハケ調整痕を残すもの（73・74）が認められることより鉢底部と考えられる。D（76）は粘土帶を底面に貼付け、高台状の上げ底をつくっているが、外底面は他のものと同様一方向ヘラ磨き調整を施す。わずか一例認められるにすぎず器形は不明であるが、鉢の可能性が強いものと考えられる。

（2）その他の遺物

粘 土 塊

土器窓に混在して検出されたもので、13点出土している。胎土・焼成・色調は弥生土器と全く同質で手捏ねのものである。定型化した形態をなさず、大きさ・重量とも様々である（第1表）が、表面が比較的平滑で凹凸が少なく、ナデた痕跡を有すもの（83~85）と表面に深く凹む指頭圧痕を残し凹凸の頗著なもの（86・87）とがある。

この種の遺物については類例をほとんど知らないが、若干類似していると考えられるものに吹越遺跡の住居跡出土の粘土塊で、一時投弾と考えられたものがある。^①

本遺跡出土例の場合、重量、形態とも一定していなく投弾としての用途も考えにくく、その性格については現段階では不分明といわざるをえない。今後の類例の増加を待って検討したい。

土師質土器

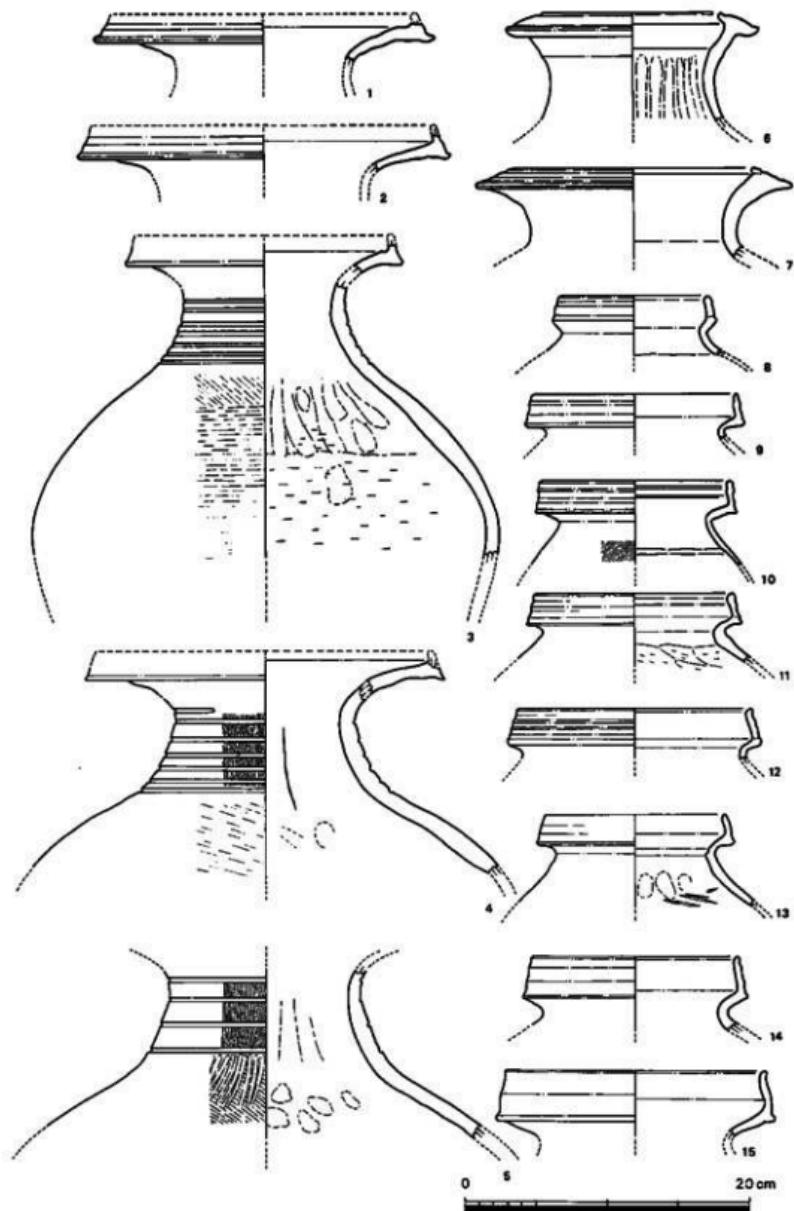
9 T表土中より出土したもので直あるいは杯と考えられる。底面は回転ヘラ切りで、体部には回転利用による横ナデ調整、内底面には仕上げナデ調整が認められ、胎土は淡黄褐色を呈す。中世の遺物と考えられる。

	長	幅	厚	重量	備考		長	幅	厚	重量	備考
1	2.6	2.2	0.9	6.2g	第12図 83	8	3.1	2.5	2.3	10.1g	
2	3.7	2.4	1.6	10.8g	〃 84	9	2.3	2.1	1.3	4.7g	
3	3.6	3.1	1.6	13.9g	〃 85	10	2.9	2.4	2.7	6.7g	
4	4.6	3.0	2.6	19g	〃 86	11	1.3	1.6	0.8	1.4g	
5	4.6	3.6	2.8	35.2g	〃 87	12	2.3	1.9	1.2	4.6g	
6	3.8	3.2	2.2	16g		13	2.0	1.5	1.3	2.5g	
7	4.3	2.5	1.9	17.6g							

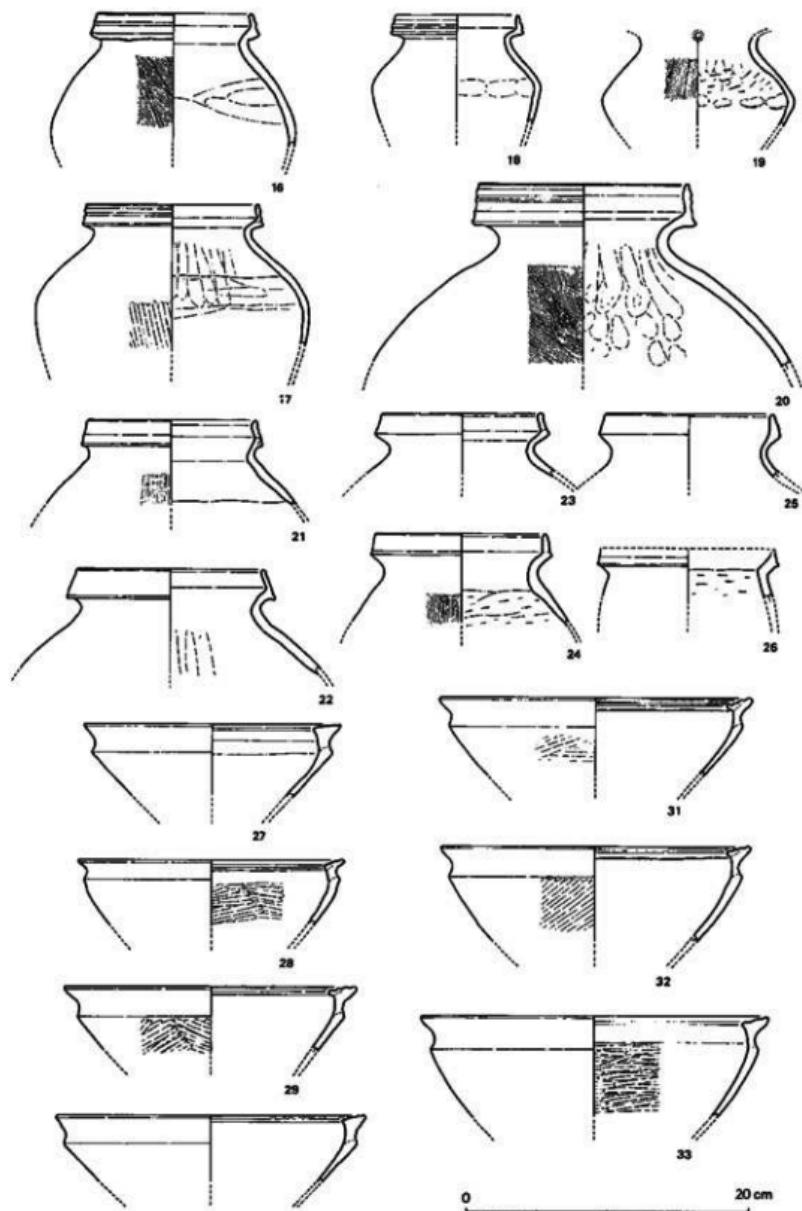
第1表 粘土塊計測表 (単位cm)

注 ① 吹越遺跡子備調査団「吹越遺跡子備調査概報」平生町文化財資料2 1970

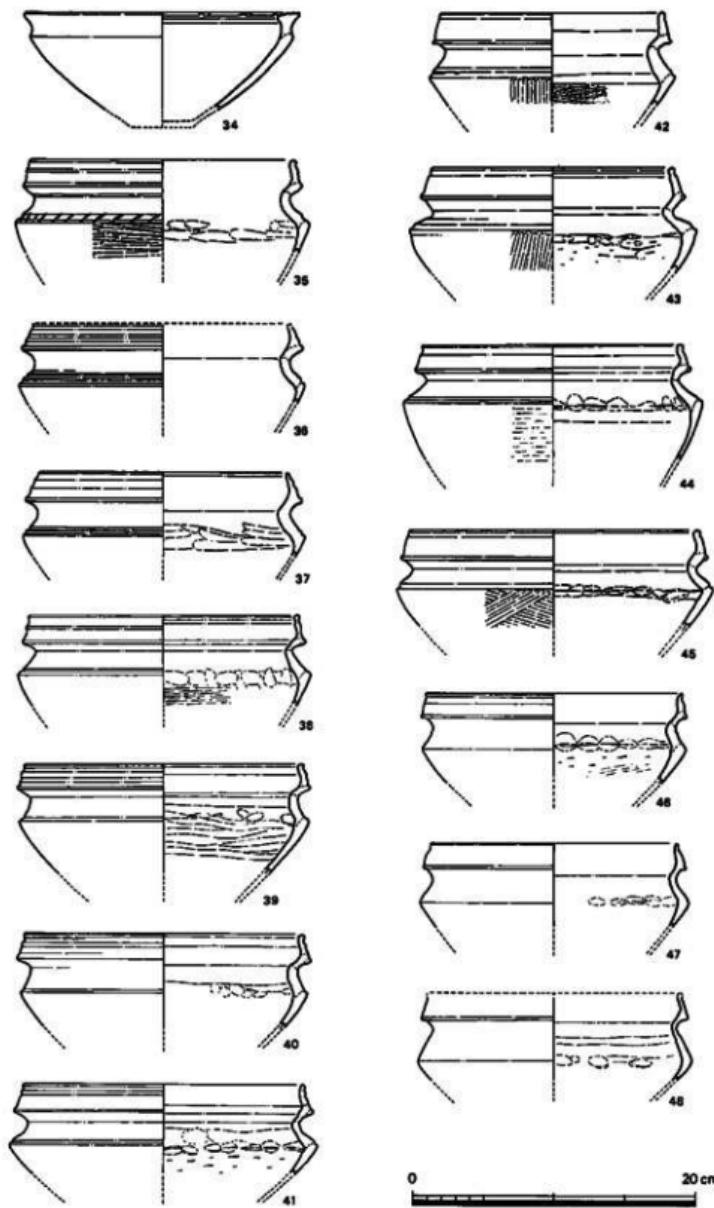
吹越第2次調査団「吹越遺跡第2次調査概報」平生町文化財資料3 1973



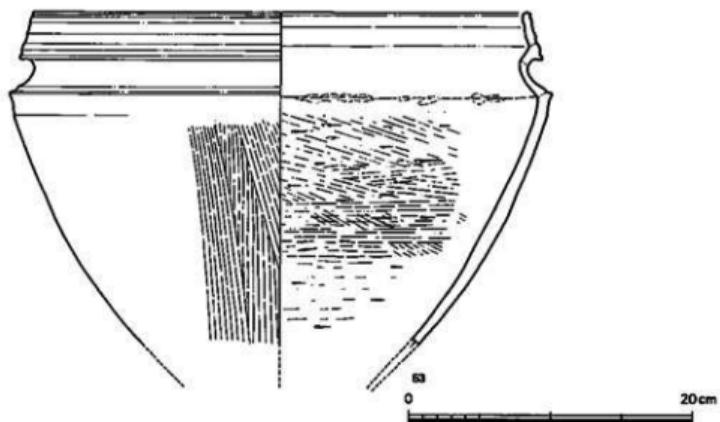
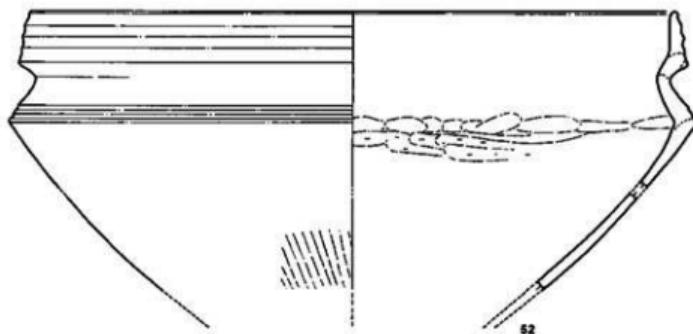
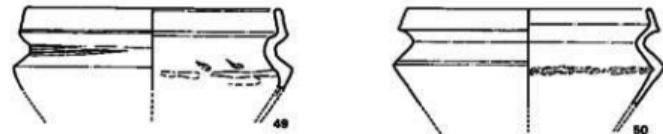
第7圖 苏生式土器実測図



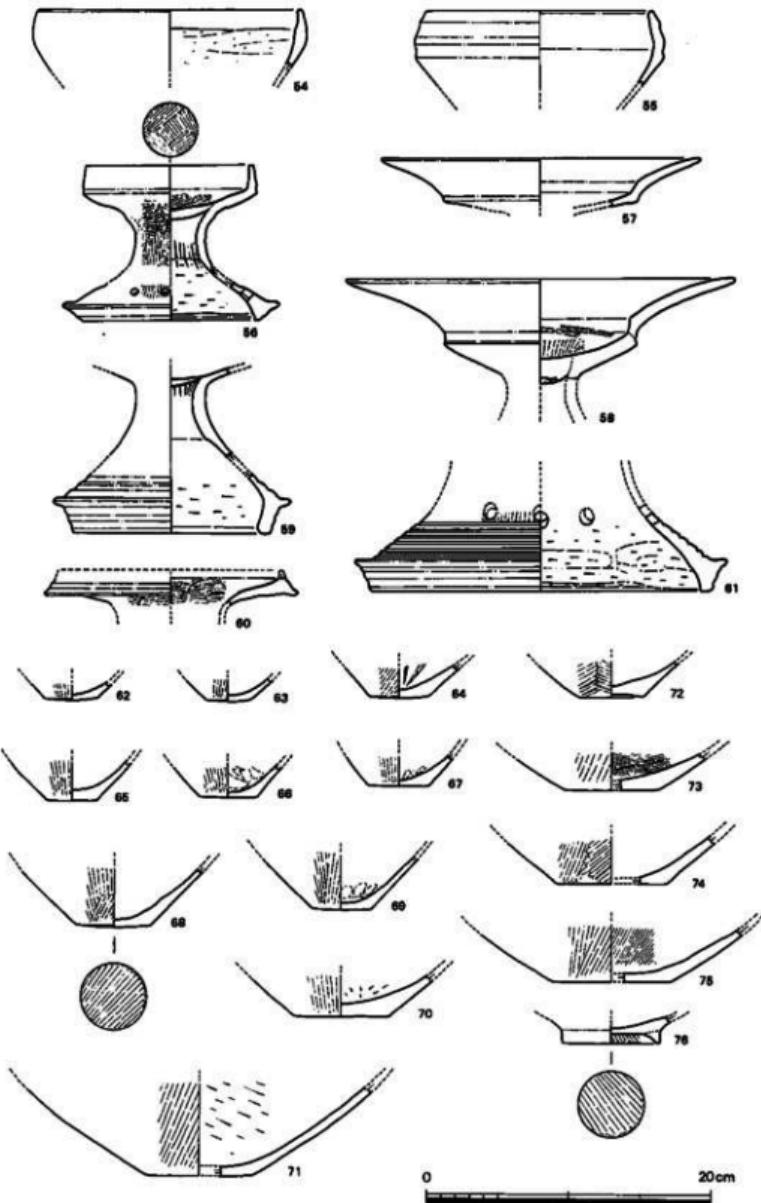
第8図 弥生式土器実測図
(17)



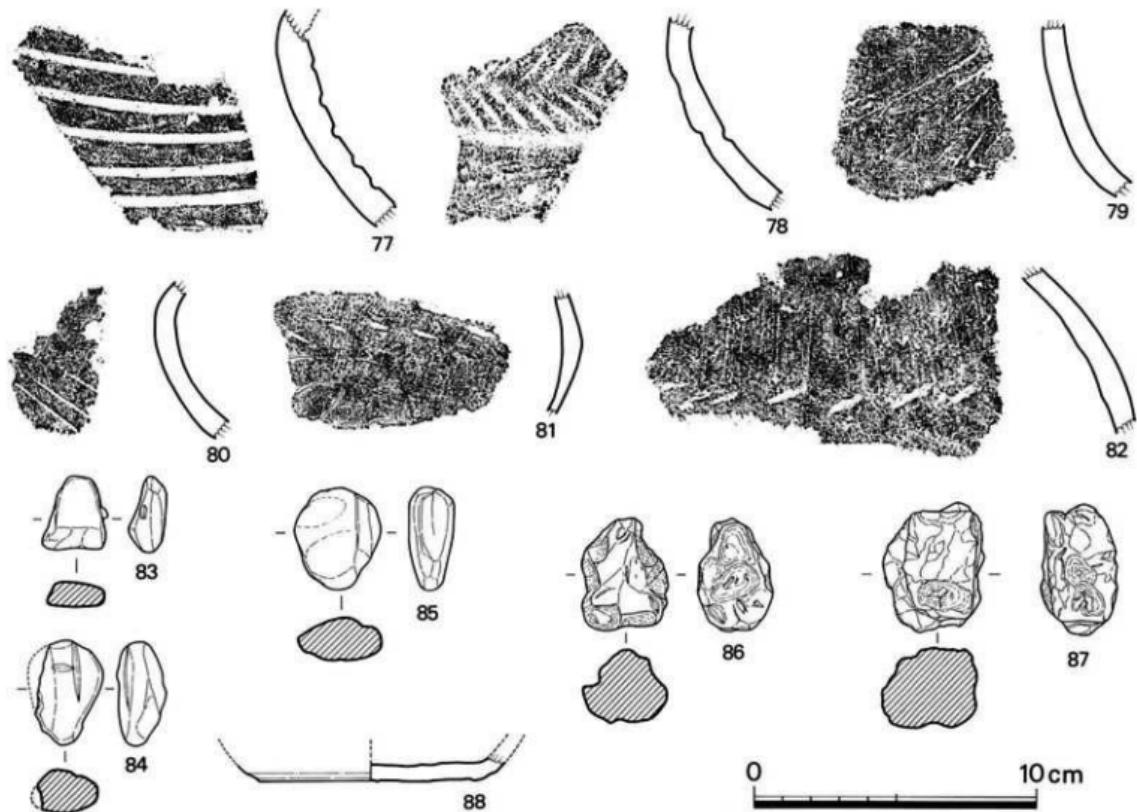
第8図
赤生式土器実測図



第10圖
赤生式土器実測図
(19)



第11図 弥生式土器実測図



第12図 弓生式土器拓影・その他の遺物実測図

V ま と め

堂塙内遺跡で出土した遺物は丘陵斜面の狭い凹状部に集中して出土したものである。しかし包含層そのものは自然地形に支配された堆積状況を示し、遺物も地形の傾斜に沿って流れ込むようなあり方をみせ、何ら遺構らしき落ち込みも認められなかつたことより、遺物に直接的に結びつく遺構が丘陵斜面に存在しないことは明らかといえる。

遺物の集中的出土状況より祭祀的な性格も想定したが、周辺の丘陵との間に大きな地形の変化は見い出せず、丘陵斜面及び丘陵上にも祭祀の対象物となり得るようなものも何ら認められない。また土器の器種構成の点においても、祭祀遺物として一般的な高环や器合などの供獻形態の器種は極めて少なく、しばしば祭祀遺跡で見い出される丹塗りなどの特殊な土器も全く認められることなど、祭祀的性格を考えるのも困難といえよう。むしろ丘陵頭部や東側斜面で土器片が表採された他、東側斜面の調査区で土器片とともに地山直上で炭化材を含む燒土面の広がりが検出されたことより、丘陵上に立地する小集落の存在を想定した方が妥当と考えられる。丘陵上平坦部は後世の烟の耕作により、荒れ地山が露出しており、遺構はほとんど削平されてしまったものと考えられるが、東側斜面に焼土面が確認されたことより、この区域には遺構が残存している可能性が強いものと考えられる。しかし同地点より中世のものと考えられる土器質土器も出土しており、焼土面がいざれの時期に属するものかはいまだ不明といわざるをえず、今後の精査を必要とする。

丘陵上に小集落が存在したものであるならば、遺物の出土状況も集落との有機的関連のもとで理解されるものと考えられる。

土器窯は集落遺跡に付随してしばしば認められるものであり、集落周辺の自然地形の凹みや谷状遺構にその出土状況を見い出すものが多い。多くの場合日常使用と考えられる各種の器種が現在した集積状況を示し、使用不可能あるいは不必要となつたものを意識的に特定の場所に投棄した可能性が強く、堂塙内遺跡の土器窯もその出土状況よりみて、ほぼ同性格のものと考えてよいのではないかと考えられる。

なお丘陵上の平坦部は比較的狭いものであり、集落が存在したとしても小規模なものであったと想定される。丘陵頭部は標高約200mであり、南方から南東方向にかけては松永溝、尾道水道を眺望できる高地である。また周辺は、ほぼ同高度の丘陵が連なる山間地域であり、一般的な遺跡の立地状況に比してやや特異な地理環境にあるといえる。しかし周辺に堂塙内西遺跡や摩阿衍寺遺跡など、本遺跡と同様高地に立地する遺跡が認められることより、この地域では山間地域の遺跡立地の共通性とも考えられ、小単位の集団が散在していたものと推測することもできる。ただこれら高地の遺跡の生産基盤を想定した場合、堂塙内遺跡では丘陵下約20mの狭い谷間に水田が存在し、当時すでにこの谷間に水田として利用していた可能性も考えることもできるが、開発能力や生産力の点よりみて、水田耕作を基盤とするならば、地形的には標高160m以下の面に適地が認められることから若干疑問を有するものといえる。このことよりむしろ山間高地の遺跡の場合、水田耕作以外に畑作などの生産基盤を想定すべきではないかと考えられる。しかし、県内では山間地域の遺跡の調査例は少なく、また山間地域の集団のあり方もほとんど検討されておらず、比較資料に乏しい現段階では逐次は危険であり予察に止どめ堂塙内遺跡の第2次調査の結果を待つて再検討してみたい。

なお、本遺跡では弥生後期の土器が多量に出土し、しかもこれらは形態・成形手法の特徴より形式的まとまりをもつと考えられることからⅠ類（壺形A・B、鉢形B、高杯A）とⅡ類（壺形C、甕形A、鉢形B、高杯B、器台）の二形式に分類されると考えられ、広島県東部地域における後期弥生式土器の編年研究上好資料を得ることができたといえる。Ⅰ類は壺・鉢・高杯の器種を抽出することができ、いずれも形態・成形手法に中期的様相を強く残すものであることより後期初頭に位置づけられる。Ⅱ類は壺・甕・鉢・高杯・器台の器種構成よりなるものであるが、明らかにⅠ類よりも後出的要素が強くⅠ類からの発展形式と考えられる。^① 壺の長頸化や、大形器台の成形手法また器種構成などに、岡山県南部地域に広く分布する「上東式」^②と類似する特徴を見い出せることよりほぼ上東式に併行するものと考え後期前半の時期を想定した。

またⅠ・Ⅱ類とも広島県東部地域の後期の式とされている「神谷川式」の範疇に含まれるものであるが、神谷川式は後期全般にわたるものを含むことより細分化が可能といえる。

のことより當壇内Ⅰ・Ⅱ類はその古式の位相を把握し得る資料としての編年的意義をもつものと考えられる。

なおこの時期より芦田川流域を中心として広島県東部（備南）地域では、東部瀬戸内あるいは西部瀬戸内の影響を受けながらも、土器形式に独自性を生じてくる傾向が認められ、同時に土器形式の齊一化も進展し、「神谷川式」と総称される独自の文化圏を形成してくる。また遺跡も沿岸部山間部を問わず増加する様相を窺うことができ、この時期における地域集団の共同体的結合を背景とした何らかの社会変化を反映しているものと想像される。

県内では近年開発規模の拡大化に伴い、弥生時代の遺跡も集落跡・墳墓跡などの調査例が増加し、かなりその様相が明らかにされてきつつある。しかし基礎的作業である土器の編年研究は他地域に比べ著しく立ち遅れおり、県内における弥生時代の社会構造の分析を不十分なものに止どまらせている一要因となっているともいえ、土器編年の早期確立が望まれる。

注① 鎌木義昌「山陽地方」『弥生式土器集成（本編）』、1964

岡山県教育委員会「上東遺跡の調査」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第2集 1973

② 分類基準及び編年的位置づけに関する具体的説明は紙数の都合上本報告では割愛せざるをえなかった。

他日改めた機会に報告したい。

③ 潮見 浩「山陽地方」『弥生式土器集成（本編）』、1964

脇坂光彦・小部 隆「芦品郡新市町神谷川遺跡の資料」地歴部誌第4号 1976

図 版

図版 1



a 遺跡近景（西より）



b 同 上（東より）

図版 2



a 遺物包含層検出状態（西より）



b 同 上 (東より)

図版 3



a 遺物出土状態（東より）



b 同 上 （西より）

図版 4

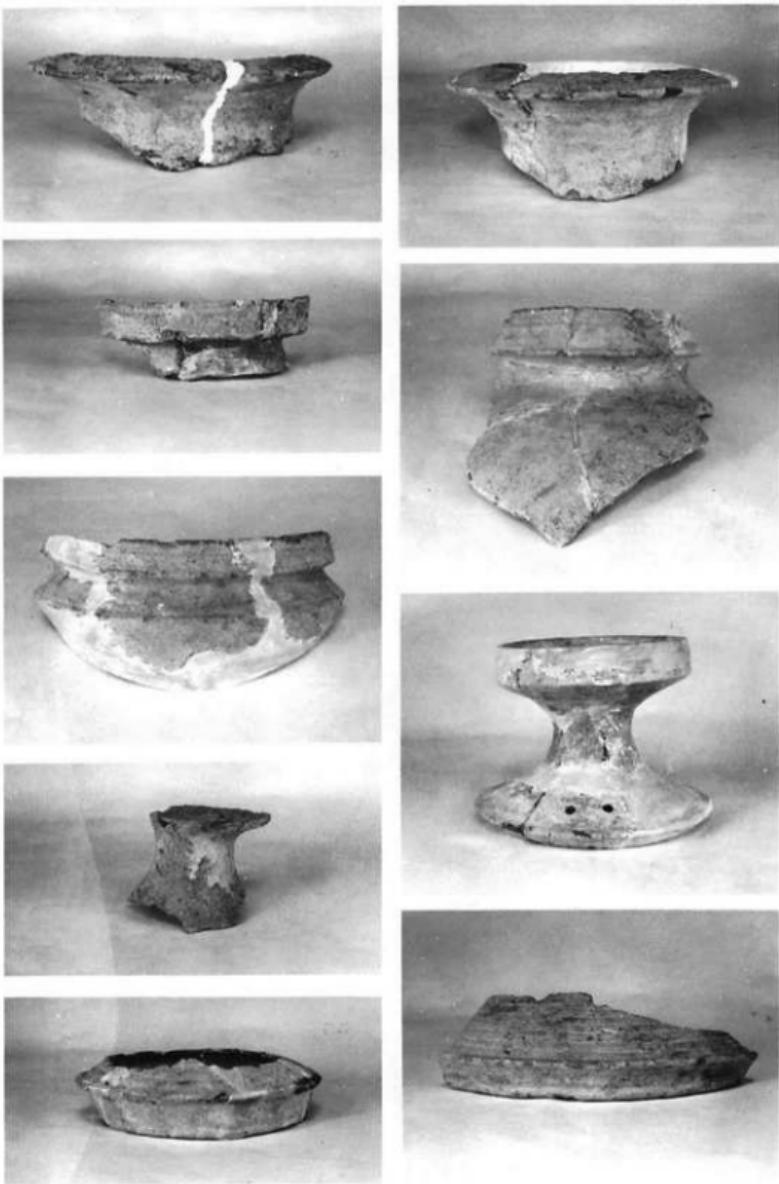


a 遺物出土状態（北西より）



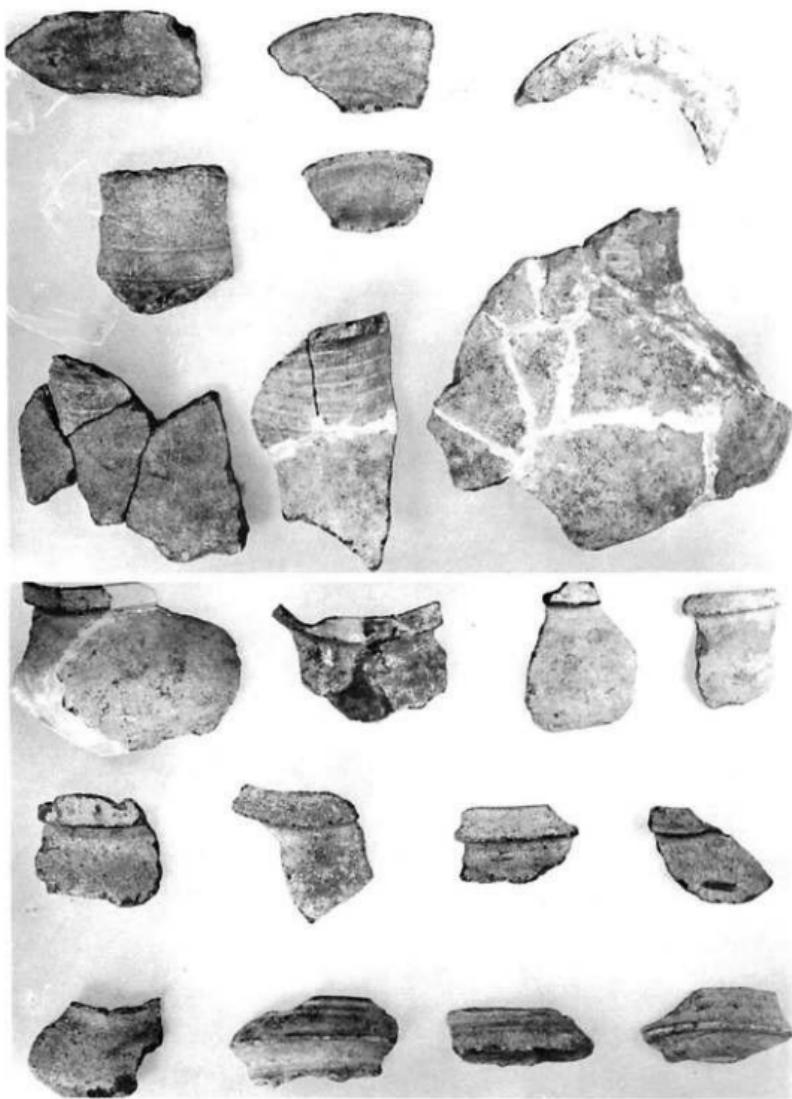
b 同 上

図版 5



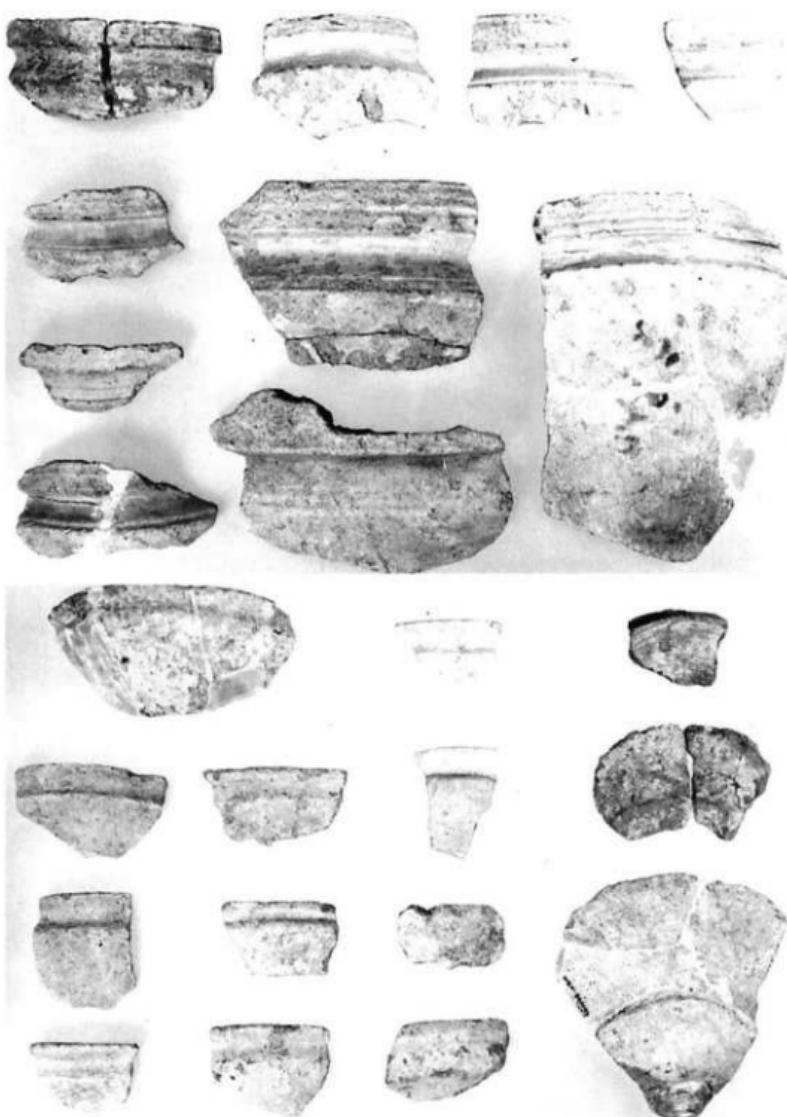
弥生式土器 (1 : 4)

図版 6



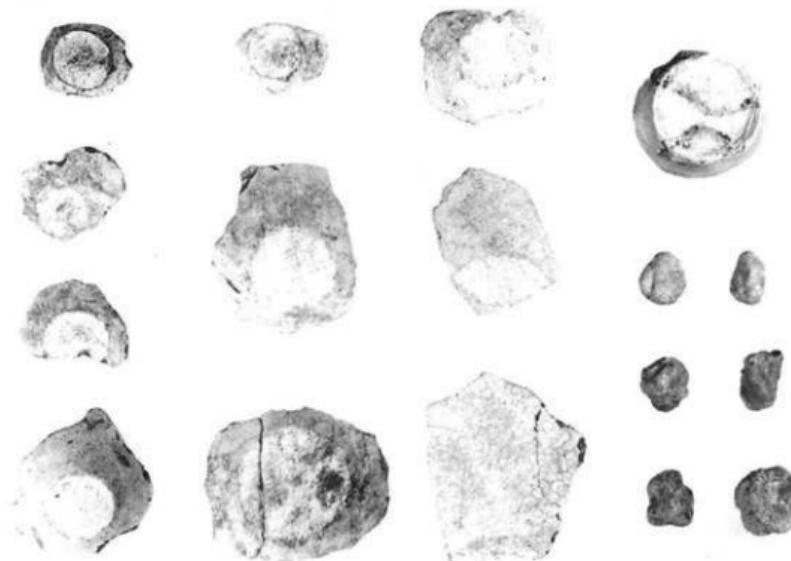
弥生式土器（1：4）

図版 7



弥生式土器 (1 : 4)

圖版 8



弥生式土器・粘土塊 (1 : 4)

昭和 52 年 3 月

堂垣内遺跡発掘調査報告

編集・発行 広島県教育委員会

印 刷 株式会社柳盛社印刷所
広島市東白島町 8-23